

ビルマ語の「上」を表す名詞の後置詞的用法について

加藤 昌彦*
KATO Atsuhiko

Abstract:

On the Postposition-like Usage of a Burmese Noun that Means “on”

The Burmese noun *ၢပ္မံ*, which means “on, upper part” can be used like a postposition. In this paper, it is referred to as the “postposition-like *ၢပ္မံ*”. It can be classified into two types: one is exchangeable with the postposition *kò* (so-called “object marker”), while the other is not. The noun *ၢပ္မံ* that is not exchangeable with *kò* means “against” when it occurs with a stative verb, and means “about” when it occurs with a speech verb. The exchangeable *ၢပ္မံ*, in one case, marks the normal undergoer noun phrase, whereas in another, it marks the noun phrase raised from the complement sentence as the undergoer noun phrase of the matrix sentence.

Generally, verbs that can mark the non-subject argument with *ၢပ္မံ* are considered to be low in terms of affectedness. Many of these are psychological verbs. Psychological verbs in Burmese can be categorized into Groups I and II, depending on how the noun denoting the object of the psychological state is marked. From the results of the comparison of these two groups, I demonstrate that if a psychological verb that can take a noun denoting the object of the psychological state is low in controllability, it can always mark the noun with *ၢပ္မံ*.

Keywords : relator noun, case, affectedness, volitionality, transitivity

キーワード : 関係名詞, 格, 被動作性, 意志性, 他動性

1. はじめに

ビルマ語はシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属する言語である。ビルマ語には数種の方言群があるが、本稿では標準ビルマ語とも呼ぶことのできるヤンゴン・マンダレー方言の口語体を扱う。チベット・ビルマ語派に属する言語の大部分は OV 型の基本語

* 大阪大学言語文化研究科言語社会専攻・准教授

順を持つ。ビルマ語もその例に漏れず、OVを基本語順とする。ビルマ語において、節中における名詞の文法的／意味的役割は、名詞に後置される助辞（particle）によって表されることが多い。その点でこの言語は膠着語的な特徴を有すると言ってよい。他動詞文におけるA（行為者項）とP（被動者項）および自動詞文におけるS（唯一項）は基本的に無標示で現れることができるが、AとSには後置詞kâ（声門閉鎖音以外の後ではgâ）が後置されることがある、Pには後置詞kò（声門閉鎖音以外の後ではgò）が後置されることがある。すなわち、後置詞による標示は対格型である。他動詞文の例を（1）に、自動詞文の例を（2）に示す。

(1) ɳà (gâ) dì ɳá (gò) sá dè
1sg SUB この 魚 KO 食べる RL
「私はこの魚を食べた」

(2) ɳà (gâ) thâ dè
1sg SUB 立つ RL
「私は立った」

ビルマ語には、物体の一部や物体を取りまく空間を表す、?áthé「中」、?ápyin「外」、?ápò「上(物体に隣接する空間)」、?áthé?「上(物体から離れた空間)」、?au?「下」、(?á)cé「前」、(?á)nau?「後」などの一連の名詞がある。これまで幾人かの研究者が、これらを場所という意味の場（semantic field）に関わるという観点などから一括りにし、様々な名称で呼んできた。Okell [1969: 141] の location-noun や、澤田 [1998: 18] および岡野 [2007: 44] の「局所名詞」はその例である。藪 [1992: 581] はこれらと時を表す名詞をあわせて「時空名詞」と呼んだ。また、DeLancey [1997] や Myint Soe [1999: 83–91] は、これらを relator noun の一種と捉え、?átwé?「～のために」などの後置詞的機能を持つ名詞と同じ範疇に分類している。

このような場所を表す名詞のうち?ápò「上」には、後置詞¹のように働く用法がある。本稿ではこのような?ápòを「後置詞的?ápò」(postposition-like ?ápò)と呼ぶ。本稿の目的は、後置詞的?ápòの文法的振舞いや、共起し得る動詞の意味特徴を明らかにすることである。

(3)から(5)は後置詞的?ápòが使われた文例である。(3)における?ápòは「～に対して」の意を表しており、(4)における?ápòは「～に関して」の意を表している。一方、(5)は、?ápòが受動者の意味役割を持つ名詞句に後続する例である。このように、後置詞的?ápòは「～に対して」「～に関して」という意味を表したり、受動者名詞句を標示したりする。

1 本稿では、名詞に後置されて動詞や他の名詞との関係を表す助辞を後置詞と呼ぶ。ビルマ語の後置詞には、主語に後置されるkâ、受動者などを表すkò、場所を表すhmà、道具や随伴者を表すnèなどなどがある。

(3) t_ù m_{àunbâ} ?_{ăpò} d_{ăbó} k_{áun} d_è
 3sg (有名詞) 上 親切な RL
 「彼はマウンバに対して親切だ」²

(4) t_ù m_{àunbâ} ?_{ăpò} k_{áun} j_{áun} p_{yó} d_è
 3sg (有名詞) 上 良い こと 話す RL
 「彼はマウンバに関して良い噂を話した」

(5) t_ù m_{àunbâ} ?_{ăpò} y_{òun} d_è
 3sg (有名詞) 上 信じる RL
 「彼はマウンバのことを信じている」

ところで, ?_{ăpò} が原義において指示する空間は, 物体の上側に直接隣接する空間である。次の文を見られたい。

(6) z_{ăbwé} y_ê ?_{ăpò} hm_ă m_{íjáun} c_î d_è
 机 の 上 LOC 蛍光灯 ある RL
 「机の上に蛍光灯がある」

この文が表すのは, 「蛍光灯」が机に直接触れる状態で置かれているという状況である。蛍光灯がもし天井から紐か何かで吊り下がっていて, 机に触れていない状態であるなら, 次のように, 物体から離れた上側の空間を表す名詞 ?_{ăth ?} を用いて表現しなければならない。

(7) z_{ăbwé} y_ê ?_{ăth ?} hm_ă m_{íjáun} c_î d_è
 机 の 上 LOC 蛍光灯 ある RL
 「机の上に蛍光灯がある」

次に, 後置詞的 ?_{ăpò} と空間を表す ?_{ăpò} の違いを三つ指摘しておく。一つは, 後置詞との共起関係である。空間を表す ?_{ăpò} の後には後置詞が現れることができる。次の例に見るとおりである。

2 d_{ăbó} k_{áun} 「親切な」は, 「心+良い」からなる 'tied-noun verb' である [Okell 1969: 36 参照]。本発表ではこのようなものも「動詞」に含める。東アジアや東南アジアの諸言語では, このような名詞と動詞からなるイディオムが感情や心理を表すことがよくある。これを Matisoff [1986] は psycho-collocation と呼んでいる。

(8) zābwé ?āpò hmà cî dè
 机 上 LOC ある RL
 「机の上にある」

この文の後置詞 hmà は省けない。一方、後置詞的 ?āpò の後には一般に、後置詞が現れることはない。次の例は hmà があるために許容度が低い。

(3') ? t̥ù màunbâ ?āpò **hmà** d̥ābó káun dè
 3sg (人名) 上 LOC 親切な RL
 「彼はマウンバに対して親切だ」

後置詞と共に起しにくいという事実は、後置詞的 ?āpò そのものが後置詞になりつつあることを示唆する。ただし、後置詞的 ?āpò の後に後置詞 hmà が現れる場合がある。それについては 4 で述べる。

二つめは、接頭辞 ?ā- の脱落可能性である。空間を表す ?āpò の ?ā- は次のように脱落することがある。その際、p は声門閉鎖音の後以外では b と交替する³。

(8') zābwé bò hmà cî dè
 机 上 LOC ある RL
 「机の上にある」

しかし、次に示すとおり、後置詞的 ?āpò の場合、?ā- が脱落することはない。

(9) t̥ù màunbâ {?āpò / *bò} d̥ābó káun dè (=3)
 3sg (人名) 上 親切な RL
 「彼はマウンバに対して親切だ」

(10) nàinjàn {?āpò / *bò} t̥i?ṣà cî dè
 国 上 忠誠心のある RL
 「国（祖国）に対して忠誠心がある」

三つめは、後置詞的 ?āpò が、基本的には「人間」あるいは (10) の例に見える国家などの「人間を構成員とする組織」を表す名詞句とのみ親和性が高いという点である。空間を表す ?āpò は、例えば (8) の例のように無生物名詞にも後置され得るし、また、有生物

3 Wheatley [1982: 132–134] が指摘するように、?ā- が脱落したものとそうでないものとでは微細な意味の差が生じことがある。

名詞にも後置され得る。しかし、後置詞的 *?ápò* は、共起した名詞句が、人間あるいは人間を構成員とする組織を表す名詞でない場合、(12) や (13) のように許容度が落ちる。

(11) ɳà màunbâ ?ápò sei? wìnzá dè
1sg (人名) 上 興味がある RL
「私はマウンバに興味がある」

(12) ? ɳà dì khwé ?ápò sei? wìnzá dè
1sg この 犬 上 興味がある RL
(私はこの犬に興味がある)

(13) * ɳà dì zábwé ?ápò sei? wìnzá dè
1sg この 机 上 興味がある RL
(私はこの机に興味がある)

(12) や (13) は、次のように *?ápò* を後置詞 *kò* に換えれば適格な文になる。

(12') ɳà dì khwé gò sei? wìnzá dè
1sg この 犬 KO 興味がある RL
「私はこの犬に興味がある」

(13') ɳà dì zábwé gò sei? wìnzá dè
1sg この 机 KO 興味がある RL
「私はこの机に興味がある」

なお、(12) の文は、「この犬」に「私」が並々ならぬ愛着を持っている場合には容認度が上がるようである。

上記三つの特徴は、名詞 *?ápò* が元来持っていた特徴を失っていることを示す事実である。特に一つめの、後置詞と共に起しにくいという特徴は、後置詞的 *?ápò* が後置詞になりつつあることを示唆していて重要である。ただし、後置詞的 *?ápò* が名詞性をまだ保持していることにも留意すべきである。下の例では、後置詞的 *?ápò* の前に、所有を表す後置詞 *yê* が現れている。

(3'') tìù màunbâ yê ?ápò dăbó káun dè
3sg (人名) の 上 親切な RL
「彼はマウンバに対して親切だ」

ビルマ語においては後置詞が *yê* に後続することはない。*yê* の後に現れることのできる要素は名詞のみである。このことから、後置詞的 *?ápò* は共時的にはあくまでも名詞であると見なしたい。

先行研究について述べておくと、Okell [1969: 391–392] と Okell & Allott [2001: 122] が、名詞 *?ápò* が後置詞的に使われることに気付いているようだが、文例を挙げるにとどまっている。Okell & Allott [ibid.] が示した例を (14) (15) に掲げる。

(14) tû ?ápò tòdòlé dábó káun dè
3sg 上 かなり 親切な RL
'They have been pretty kind to him.'

(15) ta?mádò ?ápò mähmànmäkàn dädín myá tídó pyóshò jíN
国軍 上 不正 ニュース (複数) こそそ 話す こと
'Secretly spreading false reports about the army.'

筆者の知る限りでは、後置詞的 *?ápò* の文法的振舞いについて詳細に論じた研究はこれまでないようである。

2. 後置詞的 *?ápò* の分類とそれぞれの機能

節中に現れた後置詞的 *?ápò* には、後置詞 *kò* に交換できる場合と交換できない場合とがある。以下では、2.1 で *kò* との交換が不可能な場合を、2.2 で *kò* との交換が可能な場合を扱い、それぞれの特徴を記述する。

後置詞的 *?ápò* の分類に後置詞 *kò* を用いるからには、この後置詞の機能について述べておく必要がある。Stewart [1936: 26, 1955: 11] や Okell [1969: 323] は *kò* の機能のひとつに object を表す働きを挙げる。確かに、「目的語」という用語によって想起されるような名詞句には多く *kò* が後置され得る。ただ、Sawada [1995: 177] が指摘するように、ビルマ語に目的語という文法機能を設定することには困難が伴うため、*kò* を目的語を表す後置詞と見なすことには問題がある。そのため、本稿では、とりあえず *kò* の文法機能についての議論はせず、ただ単に *kò* が後続する名詞句の意味役割を列挙するにとどめておくことにする。後置詞 *kò* が後続する名詞句が担う意味役割には、(16) や (17) に示すような受動者、(18) のような移動の着点、(19) のような授受行為の受領者などがある。後置詞 *kò* の用法の詳細については Yabu [1994], Sawada [1995], 岡野 [2010] などを参照されたい。

(16) njà tû ?éiN gò phyé? tè
1sg 彼の 家 KO 壊す RL
'私は彼の家を壊した'

(17) ɳà màunbâ gò yai? tè
1sg (人名) KO 殆る RL
「私はマウンバを殴った」

(18) ɳà bāmàpyì gò t̪wá dè
1sg ビルマ国 KO 行く RL
「私はビルマへ行った」

(19) ɳà màunbâ gò sà?ou? pé dè
1sg (人名) KO 本 与える RL
「私はマウンバに本をやった」

2.1. kò と交換不可能な ?āpò

最初に kò と交換不可能な後置詞的 ?āpò を見ていく。ここに含まれるものは、?āpò の表す意味により 2 種類に分類できる。ひとつは、?āpò が「～に対して」の意味を表す場合で、もうひとつは「～に関して」の意味を表す場合である。意味的に考えて、kò と交換不可能な ?āpò の後続する名詞句は、動詞の項ではなく付加詞である可能性が高い。

2.1.1. 「～に対して」の意味を表す場合

?āpò が「～に対して」の意を表すのは、性状を規定するような意味を持つ状態動詞と共に起した場合である。主語は人間を表し、その人間が ?āpò によって導かれる名詞句の指示対象に対して何らかの性状を呈することを表す。下に例を挙げる。これらの ?āpò は kò と交換することができない。

(20) t̪ù ɳâ ?āpò káun dè
3sg 1sg 上 良い RL
「彼 (の態度) は私に対して良い」

(21) t̪ù ɳâ ?āpò shó dè
3sg 1sg 上 悪い RL
「彼 (の態度) は私に対して悪い」

(22) t̪ù ɳâ ?āpò tàwùn cî dè
3sg 1sg 上 責任がある RL
「彼は私に対して責任がある」

(23) တူ မာ ဘာပဲ ယောက် တဲ
 3sg 1sg 上 残酷な RL
 「彼は私に対して残酷だ」

(24) တူ မာ ဘာပဲ လူပာ သာ တဲ
 3sg 1sg 上 高圧的な RL
 「彼は私に対して高圧的だ」

(25) တူ မာ ဘာပဲ ဂဲဗာဗာ ကား တဲ
 3sg 1sg 上 親切な RL
 「彼は私に対して親切だ」

(26) တူ မာ ဘာပဲ တိုးဆာ ငါ တဲ
 3sg 1sg 上 忠誠心のある RL
 「彼は私に対して忠実だ」

2.1.2. 「～に関して」の意味を表す場合

ဘာပဲ が「～に関して」「～について」の意味を表すのは, *pyó*-「話す」, *cènà*-「発表する」, *cauʔ*-「申し上げる」などの発話を表す動詞と共に起した場合である。発話した内容が ဘာပဲ によって導かれる名詞句の指示対象に関するものであることが示される。下に例を挙げる。これらの ဘာပဲ も ကဲ と交換することができない。(30) のように ကဲ に導かれた名詞句が現れた場合, その名詞句は発話内容の聞き手を表す。

(27) တူ ကနာ ဘာပဲ မာ ကား တဲ ပြု တဲ
 3sg 1sg 上 NEG 良い (名詞化) 話す RL
 「彼は私に関して良くないことを話した」

(28) တူ ကနာ ဘာပဲ ကား တဲ ဘားကား ပြု တဲ
 3sg 1sg 上 良い (連体節化) 事柄 話す RL
 「彼は私に関して良い事柄を話した」

(29) တူ ကနာ ဘာပဲ မားမားမားကား ဂဲဗာဗာ ပြု တဲ
 3sg 1sg 上 不正 ニュース 話す RL
 「彼は私に関して芳しくないニュースを話した」

(30) màunmàun tû gò cǎn̄j ʔāp̄ò māhmànmākàn dādín pyó dè
 (人名) 3sg KO 1sg 上 不正 ニュース 話す RL
 「マウンマウンは彼に、私について芳しくないニュースを話した」

2.2. kò と交換可能な ʔāp̄ò

次に、ʔāp̄ò を後置詞 kò と交換できる場合について述べる。kò と交換可能な ʔāp̄ò で標示された名詞句は、補文から主文へ繰り上げられたものか否かという統語的観点から二つに分類することができる。すなわち、繰り上げを伴わない名詞句と、補文から主文の名詞句として繰り上げられた名詞句である。いずれの場合であれ、kò との交換が可能な ʔāp̄ò で標示された名詞句は、受動者 (undergoer) の意味役割を持つ⁴。2.2.1 では、ʔāp̄ò が繰り上げを伴わない通常の受動者名詞句 (undergoer noun phrase) に後続する場合について述べ、2.2.2 では、主文の受動者名詞句として繰り上げられた補文の主語名詞句に後続する場合について述べる。

2.2.1. 通常の受動者名詞句に後続する場合

まず次の (31) を見ていただきたい。この文で ʔāp̄ò は、受動者を表す名詞句 màunbâ に後続している。

(31) màunbâ ʔāp̄ò cìnnâ dè
 (人名) 上 愛情を示す RL
 「マウンバに愛情を示す」

この文の ʔāp̄ò は、次の (32) に示すように後置詞 kò との交換が可能である。

(32) màunbâ gò cìnnâ dè
 (人名) KO 愛情を示す RL
 「マウンバに愛情を示す」

次節 2.2.2 で論じる、繰り上げを生じる場合を除くと、このように ʔāp̄ò を kò と交換できる節の主要部として現れることのできる動詞は、意味的に、(i) 心理や感情を表すもの、(ii) 依存・影響などの二者間の力関係を表すもの、の 2 種に分けることができる。以下にこれまでに見つかった動詞をすべて掲げる。配列順は原田・大野 [1979] の辞書に従う。

4 受動者 (undergoer) は、Role and Reference Grammar で動作者 (actor) とともに提唱されている macrorole のひとつで、被動作者タイプ (PATIENT-type) の意味役割を包括する概念である [Van Valin & LaPolla 1997: 139 – 147 参照]。

(i) 心理や感情を表すもの

cènaʔ-「満足する」, cìnnà-「愛情を示す」, găyû saiʔ-「注意する, 気をつける」, ɳ̩-「思いやる」, nòjnì-「妬む」, hñó-「憎悪する」, ná lè-「理解する」, píñwê-「飽きる」, sàñà-「案じる」, seiʔ kòun-「愛想が尽きる」, seiʔ khû-「恨む, 憤慨する」, seiʔ châ-「安心する」, seiʔ shó-「腹を立てる」, seiʔ piʔ-「嫌気がさす」, seiʔ tò-「腹を立てる」, seiʔtáiñ câ-「納得する」, seiʔ nà-「恨む」, seiʔ pù-「心配する」, seiʔ pyεʔ-「がっかりする」, seiʔ wìñzá-「興味を持つ」, shâncìn-「反対する」, dó pwâ-「激怒する」, dóñâ thwε-「怒りを感じる」, dátâ phyiʔ-「怒りを感じる」, hñiʔtε-「好む」, mǎñálò-「妬む」, mătìngà-「疑う」, myiʔtâ thá-「親愛の情を抱く」, myaʔnó-「あがめる」, yòun-「信じる」, yòtè-「敬意を払う」, lézá-「敬う」, tăñá-「憐れむ」, dăbó pauʔ-「分かる」, tîʔsà phauʔ-「裏切る」, tî khâñ-「我慢する」, tânyózìñ cí-「愛着が深い」, tânyózìñ cî-「愛着がある」, tândâyâ cî-「疑いを抱く」, ?ăthìn cí-「買いかぶる」, ?ăthìn té-「見下す」, ?ămyìn kaʔ-「見るのも嫌な」, ?ăyòun?ăci cî-「信用する」, ?ăyòun saiʔ-「神経を集中させる」, ?ăyòun thá-「関心を寄せる」, ?âñ?ñ-「驚く」

(ii) 依存・影響などの二者間の力関係を表すもの

phîpá pé-「圧力をかける」, hmìkhò-「依存する」, hlwánmó-「影響する」, ?á kó-「頼る」, ?ózâ náun-「影響力を持つ」

さて、このような動詞を使った節で、受動者名詞句の後に ?ăpò を置いたときと kò を置いたときとではどのような違いが生じるのかを考えてみたい。

まず、(i) に挙げた動詞について考えてみる。例えば動詞 cènaʔ- を用いた次の (a) (b) を見ていただきたい。

(33) (a) ɳà măunbâ gò cènaʔ tè
1sg (人名) KO 満足な RL
「私はマウンバについて満足している」

(b) ɳà măunbâ ?ăpò cènaʔ tè
1sg (人名) 上 満足な RL
「私はマウンバについて満足している」

(33a) は「マウンバ」という人物そのものに対して満足しているというニュアンスであるのに対して、(33b) はマウンバという人物の行為や態度などに対して満足しているというニュアンスである。また、次の (a) (b) を見ていただきたい。

(34) (a) ɳà dì lù gò sei? wìnzá dè
1sg この 人 KO 興味がある RL
「私はこの人に興味がある」

(b) ɳà dì lù ?ápò sei? wìnzá dè
1sg この 人 上 興味がある RL
「私はこの人に興味がある」

(34a) は「この人」そのものに興味があるというニュアンスであるのに対して、(34b) はその人物そのものではなく、その人の行為や態度に興味があるというニュアンスになる。

このように、?ápò を使うと、名詞句の指示対象そのものではなく、指示対象の行為や態度といった、指示対象に付随するものに対する心理や感情を表す。

次に、(ii) の場合である。次の例文を見ていただきたい。

(35) (a) ɳà màunbâ gò ?á kó dè
1sg (人名) KO 頼る RL
「私はマウンバに頼っている」

(b) ɳà màunbâ ?ápò ?á kó dè
1sg (人名) 上 頼る RL
「私はマウンバに頼っている」

ここでも、(35a) のように kó を使うと、「マウンバ」という人物そのものに頼っているように感じられるが、?ápò を使った(35b) の場合は、マウンバという人物そのものよりも、その人の行為や地位などに頼っているというニュアンスに感じられるという。同様に、

(36) (a) tù màunbâ gò hlwánmó dè
3sg (人名) KO 影響する RL
「彼はマウンバに影響を与えた」

(b) tù màunbâ ?ápò hlwánmó dè
3sg (人名) 上 影響する RL
「彼はマウンバに影響を与えた」

では、kó を用いた(36a) の場合には、「マウンバ」という人物そのものに影響を与えたというニュアンスになるが、?ápò を使った(36b) の場合は、人物そのものではなく、行為や態度に影響を与えたというように感じられるという。

このように、(ii) の場合も、?ápò を使うと、名詞句の指示対象そのものではなく、指示対象の行為や態度といった、指示対象に付随するものに対する依存や影響を表すのである。

2.2.2. 主文の受動者名詞句として繰り上げられた名詞句に後続する場合

ここで言う繰り上げられた名詞句とは、下に挙げる例文で *kò* によって標示されているような名詞句である。下の例においてはすべて、三人称単数の代名詞が、動詞 *thìN*-「思う」の表す事象の受動者を表している。

(37) ɳà ʈù gò [jäpàN ʈwá dè] lô thìN nè dè
1sg 3sg KO 日本 行く RL と 思う ている RL
「私は彼を、日本に行ったのだと思っていた」

(38) ɳà ʈù gò [shó dè] lô thìN dè
1sg 3sg KO 悪い RL と 思う RL
「私は彼を悪いと思う」

(39) ɳà ʈù gò [bämà] lô thìN dè
1sg 3sg KO ビルマ人 と 思う RL
「私は彼をビルマ人だと思う」

(37) から (39) の文で *kò* で標示された名詞句は、それぞれ、(40) から (42) の補文の主語名詞句を主文の受動者名詞句として繰り上げたものであると考えることができる。このような名詞句を以降、繰り上げ名詞句と呼ぶ。

(40) ɳà [ʈù jäpàN ʈwá dè] lô thìN nè dè
1sg 3sg 日本 行く RL と 思う ている RL
「私は、彼は日本に行ったと思っていた」

(41) ɳà [ʈù shó dè] lô thìN dè
1sg 3sg 悪い RL と 思う RL
「私は、彼は悪いと思う」

(42) ɳà [ʈù bämà] lô thìN dè
1sg 3sg ビルマ人 と 思う RL
「私は、彼はビルマ人だと思う」

繰り上げ名詞句を含む文から当該の名詞句を残したまま補文を取り除くと、容認度が下がる。(43) は、(38) あるいは (39) から補文を取り除いたものである。容認度が下がるのは、繰り上げ名詞句の存在が補文の存在に強く依存していることが原因であると考えられる。そしてこのことが、これらの名詞句を補文から繰り上げたものであると考える根拠

である。

(43) ? ɳà tû gò thìn dè
1sg 3sg KO 思う RL

上述のような繰り上げを生じる動詞には、thìn-「～と思う」、myìn-「見える；～と考える」、yùshâ-「～と見なす」、dăbó thá-「～と見なす」、ta?hma?-「～と認定する」、?âunmê-「～と思い込む」などがある。すなわち、すべて思考に関する動詞だと言える。

さて、このような文における繰り上げ名詞句は、?ăpòで標示することが可能である。下に例を示す。

(44) ɳà tû ?ăpò shó dè lô thìn dè
1sg 3sg 上 悪い RL と 思う RL
「私は彼を悪いと思う」

(45) ɳà tû ?ăpò lùzó lô myìn dè
1sg 3sg 上 悪人 と 見える RL
「私は彼を悪人だと考えている」

ただし、繰り上げ名詞句を ?ăpòで標示することができるのは、補文が繰り上げ名詞句の指示対象に対する評価を表す場合のみである。したがって次のような場合は容認度が低い。「日本に行った」という内容は、繰り上げ名詞句の指示対象に対する評価とは考えにくいからである。

(46) ? ɳà tû ?ăpò jăpân tûwá dè lô thìn nè dè
1sg 3sg 上 日本 行く RL と 思う ている RL
(私は彼が日本に行ったと思っていた)

繰り上げ名詞句の標示に kòを用いた場合と ?ăpòを用いた場合との違いは次のとおりである。(47a)と(47b)では、kòを用いた(47a)が、「彼」は悪人であると決めつけたニュアンスがあるのに対して、?ăpòを用いた(47b)では、「彼」の行為は悪いのだが、「彼」自身は悪人ではないかもしれないという含みがある。

(47) (a) ηà t̥û gò shó dè lô thìn dè
 1sg 3sg KO 悪い RL と 考える RL
 「私は彼を悪い（人だ）と考えている」

(b) ηà t̥û ?ăpò shó dè lô thìn dè
 1sg 3sg 上 悪い RL と 考える RL
 「私は彼を悪い（人だ）と考えている」

したがって *Papò* を使うと、思考の内容が、対象そのものではなく、対象に付随するものに向かっていることを表すと言える。

ここまで議論から明らかなように、通常の受動者名詞句の場合であれ、繰り上げ名詞句の場合であれ、?ápòによって標示された場合には、動詞の表す心理・感情・影響力・思考といったものが、名詞句の指示対象そのものではなく、それに付随する行為・態度などへと向かっていることが表されるのである。

3. 受動者名詞句に *Pápò* の標示を許す動詞の特徴

ここでは、受動者名詞句に *?áp̥i* の標示を許す動詞の特徴のうち特に意味特徴を、他の動詞との比較を通じて明確にしていきたい。

3.1. 被動作性の観点から

まず、受動者名詞句に *?ápò* による標示を許す動詞を被動作性 (affectedness) の観点から見てみよう。これには、表1に示す、Tsunoda/角田 [1981, 1985, 1991] の提案した二項述語階層を利用したい。この二項述語階層は、被動作性の度合いを示すものであり、左に行けば行くほど対象物への被動作性が高く、右に行けば行くほど対象物への被動作性が低いということを表す。

表1: Tsunoda/角田 [1981, 1985, 1991] の二項述語階層と *2step* の使われる範囲

類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追求	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
意味	変化	無変化							
述語の例	殺す 壊す 温める	叩く 蹴る ぶつかる	see hear find	look listen	待つ 捜す	知る 分かる 覚える 忘れる	愛す 惚れる 好き 嫌う 欲しい 要る 怒る 恐れる	持つ ある 似る 欠ける 成る 含む 対応する	できる 得意 苦手 capable good

2.2で見た動詞のうち 2.2.1 の (i) に示した「心理や感情を表すもの」と 2.2.2 に示した「思考に関するもの」は表 1 の第 4 類あるいは第 5 類に属するということになるだろう。一方、2.2.1 の (ii) に示した「依存・影響などの二者間の力関係を表すもの」はおそらく第 6 類に含めることができると考えられる⁵。したがって、受動者名詞句に ?āpō の標示を許す動詞は、第 4 類、第 5 類、第 6 類に限って見られるということになる。それを表の最下段に点線で示した。第 7 類に属するビルマ語の動詞は無生物の受動者名詞句しか取ることができないので、?āpō は現れない。これを見ると、受動者名詞句に ?āpō の標示を許す動詞は対象物の被動作性が低いということが明確に見てとれるであろう。角田 [1991: 99 – 109] は、この表の右のほうへ行くにしたがって、様々な言語で典型的ではない格枠組みが現れるとする。ビルマ語においても、?āpō が使われる場合以外は、すべての類で例文 (1) に示したような名詞句標示が行われることを考えれば、?āpō による受動者名詞句の標示は典型的でない格枠組みの一例であると考えてよい。したがって、ビルマ語も、二項述語階層の右端近くに非典型的な格枠組みが現れる言語の一つであると言える。

ただし、次の 3.2 で述べるように、心理・感情を表すという点で共通する動詞であっても、?āpō の標示を許す動詞と許さない動詞がある。したがって、二項述語階層の同じ類に属しそうな動詞でも ?āpō に関わる振る舞いが分かれることには留意すべきである。表中に実線ではなく点線で示したのはそのような含みがある。

3.2. 他の心理・感情を表す動詞との比較 – 制御可能性の観点から

2.2.1 の (i) にリストアップした通り、受動者名詞句に ?āpō による標示を許す動詞の中には心理・感情を表す動詞が圧倒的に多い。しかし、心理・感情を表す動詞であっても、心理・感情の対象を表す名詞句に ?āpō の後続を許さない動詞も多いのである。ここではこの違いについて考えてみる。

本稿では、心理・感情を表す動詞を、「基本義において人間の脳内で生じる変化や状態のみを表す動詞」と定義しておく。心理・感情を表す動詞には、節中に心理・感情の対象を表す名詞句の存在を許すものと許さないものがある。許さないものには、例えば、cāun-「ぼうっとする」、sei? cí-「気が強い」、pá n̥è-「心細い」などがある。これらは、意味的に心理・感情の対象となるものが想定できない。以下の議論ではこれらの動詞を考察の対象から除く。したがって、以下、単に「心理・感情を表す動詞」という場合、節中に心理・感情の対象を表す名詞句の存在を許すもののみを指すことにする。また、2.2.2 で述べた思考を表す動詞も、定義上は心理・感情を表す動詞に入るが、補文がないと対象を表す名詞句が現れないので、これらも以下の考察からは省く。

さて、心理・感情を表す動詞を主要部とする節において、心理・感情の対象を表す名詞

5 二項述語階層は絶対的ではない、ゆるやかな尺度である。個別言語の研究に応用する場合、その言語の研究に便利なように修正すべきであることを角田が述べている [角田 1991: 103]。「依存・影響などの二者間の力関係を表す動詞」は、さしあたって第 6 類に入れておき、今後必要が生じれば修正することとしたい。たとえ第 6 類に入れることが妥当でないにしても、これらが表の左端に近い第 1 類や第 2 類に入ることはあり得ないだろう。

句を標示する形式は、後置詞 *kò* あるいは後置詞的 *?āpò* のいずれかである⁶。心理・感情を表す動詞は、心理・感情の対象を表す名詞句の標示として、(a) *kò* が現れ得るか、(b) *?āpò* が現れ得るか、の 2 点に着目して分類すると、表 2 に示す 2 群に分類することができる。I 群は *kò* のみが可能なものであり、II 群は *kò* と *?āpò* の両方が可能なものである。

表 2：心理・感情の対象を表す名詞句の標示

	<i>kò</i>	<i>?āpò</i>
I 群	yes	no
II 群	yes	yes

2.2.1 の (i) にリストアップした動詞は、すべて II 群に分類される。I 群に属すものは、次に例を示すように、*?āpò* の使用が不可能な動詞である。

(48) *ŋà t̥ū {gò / *?āpò} chi?* t̥è
1sg 3sg GO 上 愛する RL
「私は彼女を愛している」

それぞれの群には次のような動詞が含まれる。

(I 群) *kò* による標示のみが可能なもの

kò jín sà- (+) 「同情する」, *cézú tìn-* (+) 「感謝する」, *cai?*- (+) 「好む」, *cau?*- (+) 「恐がる」, *chi?*- (+) 「愛する」, *sóyèin-* (+) 「憂慮する」, *tāundâ-* (+) 「渴望する」, *mē-* (+) 「忘れる」, *móun-* (+) 「憎む」, *lwán-* (+) 「思い焦がれる」, *dǎdī yâ-* (+) 「思い出す」, *dǎdī thá-* (+) 「気をつける、警戒する」, *dǎbó cā-* (+) 「気に入る」, *dǎbó tù-* (+) 「賛成する」, *t̥í-* (+) 「知る」, *?á cā-* (+) 「羨ましい」, *?á nà-* (+) 「遠慮する、申し訳なく思う」

(II 群) *kò* と *?āpò* の両方による標示が可能なもの

cèna?- (+) 「満足する」, *cinnà-* (+) 「愛情を示す」, *gāyû sai?*- (+) 「注意する、気をつける」, *ŋ̥é-* (+) 「思いやる」, *jònìn-* (-) 「妬む」, *hñó-* (-) 「憎悪する」, *ná l̥é-* (+) 「理解する」, *jíngwé-* (-) 「飽きる」, *sànà-* (+) 「案じる」, *sei?* *koun-* (-) 「愛想が尽きる」, *sei?* *khû-* (-) 「恨む、憤慨する」, *sei?* *châ-* (+) 「安心する」, *sei?* *shó-* (-) 「腹を立てる」, *sei?* *ji?*- (-) 「嫌気がさす」, *sei?* *tò-* (-) 「腹を立てる」, *sei?* *tain cā-* (-) 「納得する」,

6 *t̥ū ?ātwé? sóyèin dè* (彼 / ため / 憂慮する / RL) 「彼のせいで不安だ」のように、「心理・感情の対象」に見える名詞句が relator noun の *?ātwé?* で標示される場合がある。本稿では、*?ātwé?* で標示されたこのような名詞句は、「心理・感情の対象」ではなく、「心理・感情の原因」を表すと考える。したがって、*?ātwé?* はここでの考察対象に含めない。

sei? nà- (-) 「恨む」, sei? pù- (-) 「心配する」, sei? pyε?- (-) 「がっかりする」, sei? wìnzá- (+) 「興味を持つ」, shâncìn- (+) 「反対する」, dó pwâ- (-) 「激怒する」, dó tâ thwε?- (-) 「怒りを感じる」, dó tâ phyi?- (-) 「怒りを感じる」, hni?tε?- (+) 「好む」, mǎnàlò- (-) 「妬む」, mǎtìngà- (-) 「疑う」, myi?tà thá- (+) 「親愛の情を抱く」, mya?nó- (+) 「あがめる」, yòun- (+) 「信じる」, yòtè- (+) 「敬意を払う」, lézá- (+) 「敬う」, tǎná- (+) 「憐れむ」, dābó pau?- (+) 「分かる」, tǐ?sà phau?- (+) 「裏切る」, tǐ khàn- (+) 「我慢する」, tǎnyózìn cí- (-) 「愛着が深い」, tǎnyózìn cí- (-) 「愛着がある」, tǎndäyâ cí- (-) 「疑いを抱く」, ?ăthìn cí- (+) 「買いかぶる」, ?ăthìn té- (+) 「見下す」, ?ămyìn ka?- (+) 「見るのも嫌な」, ?ăyòun?ăcì cí- (-) 「信用する」, ?ăyòun sai?- (+) 「神経を集中させる」, ?ăyòun thá- (-) 「関心を寄せる」, ?âñ?j- (-) 「驚く」

上のリストで丸括弧に入れた +, - は、動詞単独で命令文になれるかどうかを示したものである⁷。例えば、chi?-「愛する」のような動詞は次のように単独で命令を表すことができる。このような場合は (+) を付した。

(49) chi?
愛する 「愛せ」

一方で、sei? pù-「心配する」のような動詞は単独で命令を表すことができないので、(-) を付した。なお、「単独で」というのは、動詞の後に一切の助辞や補助動詞を置かないという意味である。丁寧を表す助辞 pà や決断・断固を表す助辞 lái?などを動詞に後続させると動詞以外の意味特徴が影響を及ぼす可能性があるため、動詞単独でのテストを行った。

ビルマ語の動詞が単独で命令文になれるかどうかには動詞の意志性 (volitionality) が関与している。ビルマ語の動詞は意志動詞 (volitional verb) と無意志動詞 (non-volitional verb) の2種類に分類することが可能である。下の (50) と (51) を見ていただきたい。

(50) nà thâ dè
1sg 立つ RL
「私は立った」

(51) nà lè dè
1sg 倒れる RL
「私は倒れた」

7 命令文になれるか否かは基本的に Dr. Shwe Pyi Soe の判断に基づいた。なお、mǎnàlò-「妬む」と mǎtìngà-「疑う」は否定接頭辞を含む動詞であるので、命令文テストにはそれぞれ mǎnàlò nê, mǎtìngà nê を用いた。

(50) の文は常に、「私」が意志的に「立つ」という動作を行ったことを表す。逆に (51) の文は常に、「私」が非意志的に倒れたことを表す。これは、ビルマ語においては語彙レベルで動詞の意志性が指定されているためである。thâ-「立つ」のような特徴を持つ動詞が意志動詞であり, lè-「倒れる」のような特徴を持つ動詞が無意志動詞である⁸。意志動詞と無意志動詞を判別するためのテストのひとつは、補助動詞 lwè 「～しやすい, ～する傾向がある」と共起するかどうかである。次のように、意志動詞は lwè と共に起せず、無意志動詞は共起する。

(50')	*	ŋà	thâ	lwè	dè
		1sg	立つ	しやすい	RL

(51')	ŋà	lè	lwè	dè
	1sg	倒れる	しやすい	RL
「私はよく卒倒する」				

逆に, yâ lwè-「～することは容易である」という単語列は、意志動詞とは共起するのに対して、無意志動詞とは共起しない。これも意志動詞と無意志動詞を見分けるためのテストのひとつである。

(50'')	ŋà	thâ	yâ	lwè	dè
	1sg	立つ	(不可避)	容易な	RL
「(この杖があれば) 私が立つことは容易だ」					

(51'')	*	ŋà	lè	yâ	lwè	dè
		1sg	倒れる	(不可避)	容易な	RL

ところで、基本的に、意志動詞は単独で命令文になることができるが、無意志動詞は単独で命令文にはなれない。例えば thâ 「立て」は可能であるが、*lè 「倒れろ」は不可能である。したがって、動詞の意志性は命令文になれるかどうかに強く関わっている。しかしながら例外がある。現在分かっている限りでは、I 群と II 群に挙げた動詞を含む心理・感情を表す動詞の場合と、ŋò-「泣く」や cháun shó-「咳をする」のような生理現象を表す動詞の場合は、無意志動詞であるのに命令文が可能になることがある。心理・感情を表す

8 東南アジア大陸部周辺の諸言語には、動詞を意志動詞（随意動詞）と無意志動詞（不随意動詞）に分類できる言語が多い。例えば、ボー・カレン語についての加藤 [2008]、タイ語についての坂本 [1994]、峰岸 [2007]、チノ語についての林 [2009: 72–73]などを参照されたい。なお、Van Valin & LaPolla [1997] による論理構造 (logical structure) の表記法によれば、ビルマ語の意志動詞の論理構造は DO (x, [do' (x, [...] と表記でき、無意志動詞の論理構造は [do' (x, [...] と表記できる。すなわち DO (x, の有無によってその差が示される。

動詞や生理現象を表す動詞の多くは無意志動詞である。ところが例えば chi?-「愛する」や ηò-「泣く」は次のように単独で命令文になることができる。

(52) chi?
愛する 「愛せ」

(53) ηò
泣く 「泣け」

これには動詞の表す事象の、意志による制御可能性 (controllability) が関与していると考えられる。「愛する」という感情を持つことが可能であるか否かは、意志によってある程度の制御が可能である。同様に「泣く」という生理現象も意志によってある程度の制御が可能である。それゆえこれらの動詞が単独で命令文になることが可能になっていると見ることができる。無意志動詞であっても、その動詞の表す事象が意志によってある程度制御可能であれば、命令文にすることが可能なのである。すなわち、単独で命令文になることが可能な動詞は、制御可能性が高いと言うことができる。

さて、先に挙げた I 群と II 群のリストを見ると、I 群の動詞はすべて命令文になれる。つまり、すべての動詞の制御可能性が高い。一方、II 群には制御可能性の高い動詞と低い動詞が混在している。これを制御可能性の側から見ると、制御可能性が高い動詞は I 群か II 群に含まれ、制御可能性が低い動詞は II 群に含まれるということになる。これを図示すると次の図 1 のとおりである。

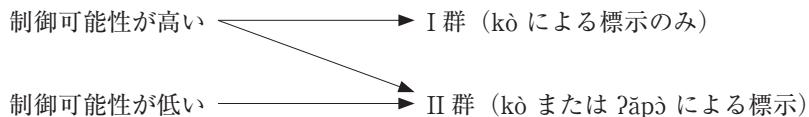


図 1: 制御可能性と動詞グループの関係

のことから、任意の心理・感情を表す動詞が、心理・感情の対象を表す名詞句に ?ápò による標示を許すか否かの予想を行う手段として、次の (54) のような一般化を提示したい。

(54) 心理・感情の対象を表す名詞句を取る任意の動詞の制御可能性が低いならば、その動詞を主要部とする節において、心理・感情の対象を表す名詞句は ?ápò で標示することができる。

なお、この一般化の逆は真でないことに注意されたい。すなわち、?ápò による標示が可能であるからといって、その動詞の制御可能性が低いとは限らない。

Onishi [2001: 36–38] は、ある言語で canonically marked A/S (標準的な標示を受ける主語) と non-canonically marked A/S (非標準的な標示を受ける主語) の対立がある場合、制御 (control) という意味的要因が、主語の標準的な標示と非標準的な標示の使い分けに関与することが多いと述べている。(54) が正しいとすれば、ビルマ語の場合、制御の概念が A/S ではなく、対象を表す名詞句の標示に関与する言語である可能性が生じる。

なお、制御可能性の低い動詞と *?āpò* による標示の関係について、(54) の一般化を提示したものの、制御可能性の高い動詞については、I 群と II 群に分かれて存在するため、制御可能性と標示との関係を一般化することが難しい。この問題の難しさは、よく似た意味の動詞が I 群と II 群に分かれている場合を見ると明白である。例えば、*caī?*-「好む」は I 群であるが、*hni?te?*-「好む」は II 群である。この二つの動詞は意味が非常によく似ている。おそらく非常に微細な意味の差が、心理・感情の対象を *?āpò* で標示できるかどうかに関わっているのだと思われる。しかし、その意味の差が制御可能性という観点で説明できるようなものなのかどうかについてはまだ結論が出せない。この点は今後の研究課題としたい。

3.3. Hopper and Thompson [1980] の他動性のパラメーターとの関わり

3.1 と 3.2 で論じた被動作性や制御可能性といった意味特徴は、Hopper and Thompson [1980] が挙げた他動性のパラメーターを思い出させる。Hopper and Thompson は、他動性のパラメーターとして、事象参加者 (participants), 動作様態 (kinesis), アスペクト (aspect), 瞬間性 (punctuality), 意志性 (volitionality), 肯定 (affirmation), 現実性 (mode), 動作能力 (agency), 被動作性 (affectedness of O), 対象の個体性 (individuation of O) の 10 種を挙げている。3.1 で述べたことは、これらのうち被動作性 (affectedness of O) に関わることである。また、3.2 で述べた制御可能性は、意志による制御可能性であるから、意志性 (volitionality) に関わることである。したがって、受動者名詞句の標示として *?āpò* が使えるか否かには、Hopper and Thompson の言う意味での他動性が関わっていると結論づけることも可能である。

4. 後置詞 *hmà* の後置を許す *?āpò* について

本稿の冒頭で、後置詞的 *?āpò* には後置詞が後続しにくいということを述べた。しかし、一部の動詞では、場所を表す後置詞 *hmà* が後続することがある。それは、*ci-*「ある」または *thá-*「置く」を含む tied-noun verb (注 2 を参照のこと) の場合である。具体的には、*myi?tà thá-* (慈悲 + 置く) 「親愛の情を抱く」, *tànyózìñ cí-* (情 + ある) 「愛着がある」, *tàndāyā cí-* (疑い + ある) 「疑いを抱く」, *?āyòun?ācì cí-* (信用 + ある) 「信用する」, *?āyòun thá-* (神経 + 置く) 「関心を寄せる」などである。次の例文を見ていただきたい。

(55) ɳà t̥û ?ãpò hmà myi?tà thá dè
 1sg 3sg 上 LOC 親愛の情を抱く RL
 「私は彼に親愛の情を抱いている」

(56) ɳà t̥û ?ãpò hmà t̥anyózìñ cî dè
 1sg 3sg 上 LOC 愛着がある RL
 「私は彼に愛着がある」

これらの例では後置詞的 ?ãpò の後に場所を表す後置詞 hmà が現れているが、文法的な文である。この点で、cî-「ある」あるいは thá-「置く」を含む tied-noun verb は特殊である。

ところで、このような、cî-「ある」や thá-「置く」を含む tied-noun verb の存在は、心理・感情の対象を表す名詞句が ?ãpò で標示されるという現象の発生原因を考える上で示唆的である。このような表現において cî-「ある」や thá-「置く」が使われていることから推察するに、ビルマ語では、心理や感情を「対象物の上に置くもの」あるいは「対象物の上に存在するもの」として捉えるというメタファーが働いているのだと思われる。おそらく、このようなメタファーによって、まずは、cî-「ある」や thá-「置く」を含む tied-noun verb を主要部とする文において ?ãpò が使われることになり、さらにこのことが発端となって、心理・感情を表す他の様々な動詞でも ?ãpò が使われるようになっていったのではないか。つまり、cî-「ある」や thá-「置く」を含む tied-noun verb が、心理・感情の対象を表す名詞句が ?ãpò で標示されるという現象を生み出す契機となったのではないか。もちろん、この仮説の検証のためには文献学的な調査や、ビルマ語諸方言間および近隣諸言語との比較言語学的な検討が必要になるだろう。

5. まとめ

最後に、本稿で論じてきたことをまとめておく。

節中に現れた後置詞的 ?ãpò には、後置詞 kò と交換不可能な場合と交換可能な場合がある。後置詞 kò と交換不可能なものは、状態を表す動詞と共にしたとき「～に対して」の意味を表し、発話を表す動詞と共にしたとき「～に関して」の意味を表す。後置詞 kò と交換可能なものは、通常の受動者名詞句を標示する場合と、補文の主語から主文の受動者名詞句として繰り上げられた名詞句を標示する場合がある。通常の受動者名詞句に ?ãpò の後置を許す動詞には、大別して、心理・感情を表す動詞と依存・影響を表す動詞がある。一方、繰り上げ名詞句の標示として ?ãpò が現れ得るのは、思考を表す動詞を用いた節においてである。

また、受動者名詞句を ?ãpò で標示できる動詞は一般に、被動者性が低いことを指摘した。この中には心理・感情を表す動詞が多い。そこで、心理・感情を表す動詞のうち ?ãpò を用いることのできる動詞とできない動詞との比較を試みた。心理・感情を表す動詞は、心理・感情の対象を表す名詞句の標示に着目すると、I群とII群に分けることができる。こ

のように分類した上で、結論として、心理・感情の対象を表す名詞句を取る任意の動詞の制御可能性が低いならば、その動詞を主要部とする節において、心理・感情の対象を表す名詞句は *?āpò* で標示することができるとの一般化を示した。

以上が本稿で論じたことである。後置詞的 *?āpò* は、受動者という中核的な意味役割を担う名詞句を標示することができる点で、非常に重要な形式である。これまでのビルマ語研究においてこの点はまったく見過ごされてきたことだった。ビルマ語の名詞句標示すなわち「格標示」の体系を考える際に、後置詞的 *?āpò* が決して無視できない存在であることは間違いない。

略号

KO	後置詞 <i>kò</i>
LOC (location)	場所を表す後置詞
NEG (negation)	否定を表す接頭辞
RL (realis)	現実法を表す動詞文標識
SUB (subject)	主語を表す後置詞

謝辞

本稿は、2008年12月6日に神戸学園都市UNITYで林範彦氏と白井聰子氏が世話役となって開催されたチベット＝ビルマ言語学研究会において発表した際の原稿に基づいている。お一人ずつの名前は挙げられないが、研究会の席上で貴重なコメントを下さった方々にお礼を申し上げたい。また、匿名の査読者の方々からは、最初の原稿における術語定義の不備や結論の妥当性等に関して懇切丁寧かつ殊のほか有益なご意見をいただき、補筆改訂の際に大いに役立った。心からの謝意を申し上げたい。

本稿で指摘した言語事実は、2005年11月から2009年4月まで大阪外国語大学および大阪大学ビルマ語専攻の客員教授の任にあったDr. Shwe Pyi Soe および御夫人のDr. Htet Htetとの議論を通して得られたものが多い。Dr. Shwe Pyi Soe 夫妻に厚く感謝の意を申し上げたい。なお、この論文の着想に至ったのは、大阪外国語大学地域文化学科ビルマ語専攻を2005年に卒業した丹羽辰宏君の卒業論文に触発されたことが直接のきっかけになっている。記して感謝の意を表したい。

本稿で用いた標準ビルマ語の表記（加藤式ビルマ語音素表記）

本稿で用いた表記法は、加藤 [2006] で示した音韻解釈に基づく音素表記である。促音節に「促音節+下降調」と「促音節+低平調」の2種類を設けることに特徴がある。

子音	母音						声調素		
p	t	t	c	k	?	i	u	mà	低平調
ph			th	ch	kh	e	o	má	高平調
b	d	d	j	g		ɛ	ɔ	mâ	下降調
(f)		s	ç		h	a		(mă)	軽声音節
		sh							
		z							
m	n	n		ŋ	n				促音節の表記と音韻解釈
hm	hn	hn		hŋ				ma?	促音節+下降調
w			y					mà?	促音節+低平調
hw									
	l (r)								
	hl								

参考文献

DeLancey, Scott, 1997, "Grammaticalization and the gradience of categories", Joan Bybee and John Haiman (eds.) *Essays on Language Function and Language Type*, pp. 51–69. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

林範彦, 2009, 『チノ語文法（悠楽方言）の記述研究』神戸市外国語大学研究叢書第43冊, 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson, 1980, "Transitivity in grammar and discourse", *Language* 56.2, pp. 251–299.

加藤昌彦, 2006, 「現代ビルマ語の借用語に見られる低い促音節」加藤重広・吉田浩美（編）『言語研究の射程』, 東京: ひつじ書房, pp. 103–126.

加藤昌彦, 2008, 「ボー・カレン語に形容詞という範疇は必要か?」『アジア・アフリカの言語と言語学』3, pp. 77–95.

Matisoff, James A., 1986, "Hearts and minds in South-East Asian languages and English: an essay in the comparative lexical semantics of psycho-collocation", *Cahiers de Linguistique d'Asie Orientale (Paris)* 15.1, pp. 5–57.

峰岸真琴, 2007, 「孤立語の他動詞性と随意性 -- タイ語を例に --」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨編『他動詞の通語的研究』東京: くろしお出版, pp. 205–216.

Myint Soe, 1999, *A Grammar of Burmese*. Ph.D. dissertation at University of Oregon.

丹羽辰宏, 2005, 「ビルマ語の動詞」, 大阪外国語大学地域文化学科卒業論文.

原田正春・大野徹, 1979, 『ビルマ語辞典』大阪: 日本ビルマ文化協会.

岡野賢二, 2007, 『現代ビルマ語文法』東京: 国際語学社.

岡野賢二, 2010, 「ビルマ語の格標示」澤田英夫編『チベット=ビルマ系言語の文法現象1: 格とその周辺』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 239–268.

Okell, John, 1969, *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. London: Oxford University Press.

Okell, John and Anna Allott, 2001, *Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms*. Richmond, Surrey: Curzon Press.

Onishi, Masayuki, 2001, "Non-canonically marked subjects and objects: parameters and properties", Alexandra Y. Aikhenvald, R.M.W. Dixon and Masayuki Onishi (eds.) *Non-canonical Marking of Subjects and Objects*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

坂本恭章, 1994, 「タイ語の thammaj <なぜ>と不随意動詞の下位分類」『アジア・アフリカ言語文化研究』46-47, pp. 409-414.

澤田英夫, 1998, 「ビルマ語文法 (2年次)」ms. (1999年補訂)

Sawada, Hideo, 1995, "On the usages and functions of particles -kou_-ka. in colloquial Burmese", Yoshio Nishi, James A. Matisoff and Yasuhiko Nagano (eds.) *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax*, Osaka: National Museum of Ethnology, pp. 153-187.

Stewart, J. A., 1936, *An Introduction to Colloquial Burmese*. Rangoon: The British Burma Press.

Stewart, J. A., 1955, *Manual of Colloquial Burmese*. London: Luzac.

Tsunoda, Tasaku, 1981, "Split case-marking patterns in verb-types and tense/aspect/mood", *Linguistics* 19, pp. 389-438.

Tsunoda, Tasaku, 1985, "Remarks on transitivity", *Journal of Linguistics* 21, pp. 385-396.

角田太作, 1991, 『世界の言語と日本語』, 東京: くろしお出版.

Van Valin, Robert D., Jr. and Randy J. LaPolla, 1997, *Syntax: structure, meaning and function*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wheatley, K. Julian, 1982, *Burmese: A Grammatical Sketch*. Ph.D. dissertation at University of California, Berkeley.

藪司郎, 1992, 「ビルマ語」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』3, 東京: 三省堂, pp. 567-610.

Yabu, Shiro, 1994, "Case particles -ká and -kou in Burmese", (In) Hajime Kitamura, Tatsuo Nishida and Yasuhiko Nagano(eds.) *Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics*. Osaka: Organizing Committee, The 26th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, pp. 730-736.

(2010. 06. 09 受理)